

被災地からみた公共事業

岩手県の宮古支局に勤務して考えたこと

講師：伊藤 智章氏（朝日新聞 論説委員、元宮古局長）

東日本大震災の特徴

- ① 原発災害、② 400⁺の広域津波被害、③ 過疎地で不況、財政難の中の巨大災害

★東北3県の沿岸被災地市町村人口／全県人口

岩手県 27万人／133万人 宮城県 170万人／234万人

福島県 52万人／202万人

高齢化、少子化、漁業不振、主力の公共事業低迷で地域が疲弊する中での巨大災害。

（高度成長入り口の1959年に起きた伊勢湾台風災害、バブル残照の1995年の阪神大震災との時代環境の違い。都市部と過疎地の違い）

→被災の巨大化（避難の足の遅かった高齢者）、復興の困難（戦後復興と比べても）。



氏名（読み）
伊藤 智章（いとう・ともあき）
所属・役職
編集委員（名古屋在勤）

主なテーマ

環境、公共事業、地方自治

プロフィール（主な経歴、担当分野、賞、著書など）

名古屋市生まれ。1988年入社。山形、函館両支局、名古屋社会部、東京社会部などで勤務。05年4月から現職。長良川河口堰や豪雨災害、水ビジネスなど、水を中心に取材を続けてきた。現在は2010年の生物多様性条約締結国会議（COP10）などについて取材中。

著作に「私の体のまま抱いて ニッポン人脈記」「ドキュメント官官接待」（いずれも共著）など。

ひとこと

長良川河口堰から水害、おいしい水まで、水についての取材を続けてきました。命の根源にかかわることで、いろんな場所で情熱を燃やす人に会いました。温暖化や水危機で、水がいつそう貴重なとき、現場の思いを伝えたい。

★民主党政権下だったことの「不幸」、あるいは「僥倖」

国会空転などで、本格的な3次補正成立は秋→復興は時間が勝負なのに。

公共事業縮減政策が一転、バラマキへ。

仮設住宅 国費1戸300万円、土地代含まず、3年が原則。→しかし、土地確保難、寒冷地仕様追加などで結局800万円強。みなし仮設も許可。次第に長期化へ。

三陸沿岸道（仙台～八戸）、東北沿岸道などを一転、推進へ。（道路族ハッスル。「命の道路」キャンペーン。復興予算19兆円の主力）

生コン、労働者足りない。3K仕事。3～5年で終わってしまう仕事に過ぎない。

建設業協会宮古支部 05年44社→11年25社に激減する中での震災。

宮古市の予算、震災前の3倍。沿岸市町村は軒並み使い切れず。マンパワー不足。

震災がれきの広域処理問題→なぜ3年で処理？「ゆっくり地元でやってくれば」

★復興町づくり

上からの押しつけと、住民の地域力の弱さ背景に

高すぎる防潮堤、カネと時間がかかりすぎる高台移転、区画整理事業など推進。

過去2番目の津波高に合わせた防潮堤を政府指示。巨大すぎるが、それでも今回より低く不安も残る→結局、ハードに頼らず、リスクを引き受ける覚悟があるかどうか。そもそも町の再建を断念すべきかもしれない。

→どういう町を望むか。災害前から地域ビジョン、話し合いの土壌醸成の必要性を痛感。

宮古市の旧田老町の場合（約800戸被災）

高台造成で105億円 285戸 区仮整理（かさ上げ含む）で30億円 220戸計画

車で20分の宮古市街地に空いた団地、アパートがあるが、田老町再建を断念できない。

大槌町、陸前高田市も同じ→ダウンサイジング日本の地方にどんな未来像を描くか。しかし強権的に故郷放棄を迫れない。自分たちで知識を得て、選択すること。安全だけでなく、スピード、先細りの将来像も考慮しつつ。

★鉄道の皮肉

あまちゃんの三陸鉄道 国費復旧（宮古以北と、釜石以南）しかし、間をつなぐJR山田線は未決着。民間企業のJR東は不採算路線に投資したくない。

では税金でやるか？ しかし、公共交通機関の使命は？ そもそも地元住民も乗らないのに……。BRT化構想。

★復興を食物にしたNPO

岩手県山田町から業務委託を受けたNPO（旭川市）がずさん運営で事業費を使い切り、2012年12月、緊急雇用していた被災者137人を解雇した。

2011年度は4・3億円

12年度は7・9億円で契約。しかし経理ずさん、使い込み疑惑で破綻。県警捜査。

緊急雇用事業 リーマン後、麻生政権下で始まり、国→県に交付した使い切り基金をもとに市町村に補助する。「どうせ国のカネ」という甘さがつけ込まれた。

★その他

語り部事業 修学旅行、被災地見学などについても。

11 4版

2014年（平成26年）5月26

夕映え



伊藤 智章

「ハチも自然の中なら怖くないな。先月の週末、友人たちと山口県の祝島を訪ねて妙なことを思った。32年間も原発計画に反対している人口約4500人の小さな島だが、ビワ畑が多いためか、視界の隅で始終、ハチが飛んでいる。海を挟んで4km先の上関原発建設予定地を眺める浜でも、住民が建てた太陽光発電装置のある牧場跡でも、棚田に向かう山道でも、いつもフーンと羽音をたてていた。都会のビル街で不意に出てきた時と違って落ち着いている自分。緑の島では自然の一部なのだ。とはいえず、予定地の海には不似合いな黄色いパイが浮かぶ。福島第一原発事故後、いったん止まった埋め立て工事は再開する可能性がある。建設反対の漁師たちも極端な不漁で、原発に伴う補償金を受けられるかどうかで揺れていた。

現場で思う 開発か保全か

何より65歳以上の人口が76%で、将来像を描きにくい。開発か、保全か。徳山ダム（岐阜）、八ツ場ダム（群馬）、東日本大震災の被災地で見たのと同じ現象に突き当たった。「便利で快適」という開発の魅力は色あせてきたが、抵抗する側の足元がもろくなっているのが悲しい。今年で記者生活30年。現場の怒りや矛盾をきちんと伝えたい。今日も祝島では毎週月曜のデモがある。もう千回以上で「ギネスもの」というお年寄りがデモをし続けるのを見ない。それが日本の現実だ。（編集委員）

13 4版

2014年（平成26年）7月23

9 4版

2014年（平成26年）7月28日

夕映え



伊藤 智章

私は名古屋生まれの名古屋育ちで、朝日新聞の名古屋本社に勤務している。転勤の多いこの会社、この業界ではかなり珍しい。とはいえず、これまで9回転勤し、長男は小学校を三つ変えた。その記者生活で久しぶりに全身が緊張したのは、東日本大震災の被災地、岩手県宮古市で勤務した時だ。避難所や仮設住宅を回り、位牌や遺影に手を合わせてから取材した。でも被災者には申し訳ないが、避難所で身を寄せ合い、助け合って暮らす姿に逆に励まされた。最初に訪ねた避難所で受付けをしていた中年の男性は、妻と子、家を失った人だった。どんなに不幸でも、生きなければいけないという、耐える強さに感動した。その被災地を再訪し、先々週、夕刊2面に「語り部をたどって」という連載を書いた。（編集委員）

被災地取材 問われる覚悟

た。津波を偶然、ビデオで撮影したが、「伝わりたくない」と言って現地以外では決して上映しないホテルの社長、昭和と三陸津波を今回の2度も津波で被災しながら、その体験を自作の紙芝居にして避難を呼びかけているおばあさんを紹介した。一見く普通の人々が、思わぬ力を発揮している話だ。記事を読んだ取材先の学者からメールをいただいた。末尾に「今後は語り部たちと同様、貴氏がどれくらい関心を持ち続け、発信して行くかです」とあった。（編集委員）

◆ご意見、ご感想は（yuubae@asahi.com）へ

夕映え



伊藤 智章

号泣県議などともかく、都議会のセクハラヤジの類にすぐ反応できるか。自信がない。多くの場合、現場は別の論理や主張が支配している。はねのけるセンスがあるか。思い出したのは、岐阜県中津川市議会のことだ。がんで声帯を失った小池公夫市議員（当時）が代議による発言を求めたのに、議会が拒否。2003年から94年、本会議一度も発言できなかった。こう書く、なんてひどい差別議員たちと罵られるだろう。でも取材には「議会発言は口頭で行う」という原則にこだわっているだけ。彼らは、意図的な差別を否定し、事前に文書入力して音声に変換するパソコン使用を認めたのに「妥協しない方が悪いんだ」と真顔で言った。一瞬ひるんできました。とはいえず、当事者の願いを聞かず、勝手に判断している。（編集委員）

現場で出くわす無神経さ

こちらは致命的。小池さんが提訴し、12年、名古屋高裁の勝訴判決が確定している。その後、謝罪に来た議員はいないという。最初から柔軟に取り組めば、しこりを残さずに済んだに違いない。経過が最近「代議裁判」（法律文化社）として出版された。私には「審の岐阜地裁判決（10年）も忘れがたい。一部勝訴を伝える裁判長の言い渡しに小池、早口、専門用語で聞き取れず、約50人の障害者たちが傍聴席で一斉に抗議した。『身内の論理』が、いかにすれてしまか。議員と同じ無神経さだ。（編集委員）

◆ご意見、ご感想は（yuubae@asahi.com）へ